

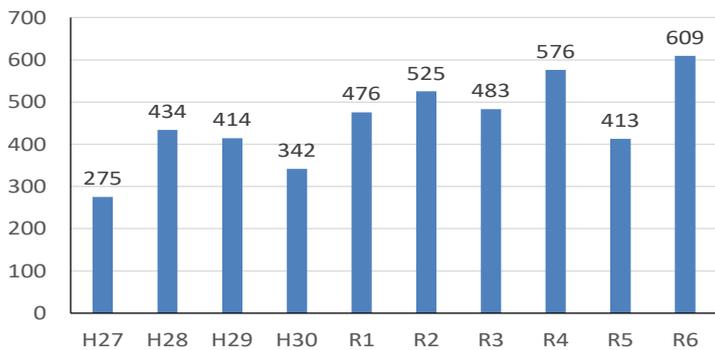
- 本県のウメは全国で第2位の産地だが、高齢化に加え、価格の低迷、それに伴う放任園が増加し、産地として危機的状況に陥っていた。
- このためH27年に「ウメ産地再生プロジェクト」を立ち上げ、①生産・産地対策 ②流通・販売対策 ③加工・商品開発を3本柱を中心に活動している。
- 令和6年は「ゆみまる」集出荷体制整備と新たな担い手確保に向けた対策について新たに取り組んだ。

## 具体的な成果

## 1 現品種課題解決のための課題整理と出荷システムの再構築

- 陥没症対策・収穫適期把握等の実証ほの設置及び速やかな農家への情報提供により、産地全体の販売単価が向上
- 共計生梅の販売単価（全農ぐんま取扱）  
H27～R1年平均単価 388円/kg  
→R2～6年平均単価 521円/kg

販売単価（円/kg）



## 2 県新育成品種導入による生産安定化とオリジナル品種集出荷体制整備

- 県育成「ゆみまる」の導入で、主力品種「白加賀」の安定生産に寄与
- 導入本数2,811本（～R2）
- R6「ゆみまる」果実集出荷体制の整備



写真1「群馬U6号」

出荷量：1.3t（R6初出荷）

「ゆみまる」によるカリカリ梅商品誕生

## 3 新たな担い手確保対策

- 将来の担い手向け栽培講習会を開催
- 新規栽培希望者40名が参加
- 貸出希望園地のリスト整備を進め、希望者とのマッチング開始

## 普及指導員の活動

## 平成27年度

- 農業革新支援専門員が中心となり、農業事務所、農業技術センター、JA等によるプロジェクトチームを設置
- 陥没症及び、収穫適期把握のための実証ほの設置、試験開始

## 平成28年度

- 標高差にあわせた出荷システムの再構築（早朝もぎの実証）
- 核色、硬核調査による適期収穫判断
- 実需者による新育成系統の加工適性評価開始

## 平成29～令和5年度

- 計画出荷によるウメ高品質維持
- 陥没症発生生理の解明・対策実施
- 予測式に基づく適期収穫実証
- 新品種の普及推進と収穫適期把握

## 令和6年度

- 「ゆみまる」集出荷体制整備
- 新規担い手確保の取り組み
- 予測式に基づく適期収穫実証
- 新品種の普及推進と収穫適期把握

## 普及指導員だからできたこと

- ・ 実需者、地元大学、市町村、県各課、農業技術センター、生産組織等と連携、総合力を発揮
- ・ 地域内の複数ある産地（生産部会）の間を取り持ち、産地間の連携強化を図った

## 「ぐんまのウメ」産地再生支援

活動期間：平成27～（継続中）

### 1. 取組の背景

本県のウメは、和歌山県に次ぐ全国第2位の産地であるが、樹の老齢化や、近年の天候不順等により生産が安定せず生産量が減少している。特に、本県の主要品種である「白加賀」は、高温障害である「陥没症」が発生しやすく、市場価格低迷の一要因となっており、対策が求められていた。そこで、関係機関が一体となって「ウメ産地再生プロジェクト」を平成27年4月17日に立ち上げ①生産・産地対策、②加工・商品開発支援、③流通・販売対策支援を3本柱として取り組んできたところである。さらに、担い手対策やオリジナル品種の活用にも取り組み、総合的な産地振興による、次世代につなげるウメ産地への再生を目指し、継続して活動を行っている。

### 2. 活動内容（詳細）

- (1) 陥没症対策実証ほの設置や、農業技術センターと連携して陥没症が起こる時期、原因等について検証した。
- (2) 収穫適期把握のための実証ほを標高別に設置、硬核状況について調査した。
- (3) 県育成ウメ「ゆみまる」（品種名「群馬U6号」）の導入による結実安定を図った。
- (4) 実需者とのマッチングにより、群馬のウメを使用した商品開発を支援した。
- (5) ウメの成分分析を行い、本県産のウメの強みを見いだした。
- (6) 流通販売対策び販促活動を行い、有利販売の支援をした。
- (7) 「ゆみまる」果実の販売対策に取り組み、集出荷体制の整備を支援した。
- (8) 新たな担い手対策として、将来の担い手候補者へ向けた栽培講習会を実施した。

### 3. 具体的な成果（詳細）

#### (1) 陥没症対策

農業技術センターの試験成績や普及実証ほ等の結果に基づき、適熟（核色3を過ぎた、胚固化完了10日後以降）収穫、30℃以上の高温が予想される日は果実の温度が低い午前収穫が効果があることが確認され、これらを踏まえて全地区で対策の徹底を呼びかけ陥没症対策を図った。その結果、陥没症発生がなく品質が確保されたため、有利な価格で販売することができた。

#### (2) 収穫適期把握による出荷体系の構築

農業技術センター、西部農業事務所と連携して標高別、品種別に硬核調査を行った。その結果、硬核は標高や品種、年度によって大きく変動し、従来の収

穫判断では用途別収穫としては誤差があることがわかった。

今までの蓄積したデータから農業技術センターで生育予測式（硬核開始期、硬核終了期、落果期）を利用したデータを情報提供し、出荷計画を立てるとともに、品種毎、用途別で収穫期間をずらし、労力分散及び適期収穫を進めて計画出荷を図った。また、JA と情報共有して計画出荷ができたため、市場から高い評価を受けた。

### (3) 県育成ウメ「ゆみまる」の導入による結実安定

ここ数年「白加賀」の不作が続いている中で、県育成ウメ「ゆみまる」は主力品種の「白加賀」と開花期が同時期で交雑和合性があるため、受粉樹として適している。また、自家結実性を持つため豊産性でもある。

令和2年までの3カ年で計画的な苗の生産配布を行い、苗木(計2,811本)を生産へ配布し結実対策を図った。また、農業技術センターと西部農業事務所と協力して、結実不良の園地2カ所で「ゆみまる」の導入による結実安定対策の現地試験をH30年度より取組を開始し導入効果を調査している。また、県園芸協会と協力して、ウメ冬季管理講習会を実施し、「ゆみまる」の剪定管理方法や受粉樹の特性等を県内生産者に周知し、適正管理による樹づくりを推進した。



写真1 ウメ新品種「群馬U6号」の冬季管理講習会

### (4) 実需者とのマッチングと商品開発

近年の夏場の猛暑等の影響もあり、ウメの需要も伸びており加工業者からも引き合いが強く安定生産と供給が求められている。新品種「群馬U6号」への期待もあり県内関係者が協力して群馬県のウメのブランド化を進めるため、商標登録について名称を「ゆみまる」と決定し登録に向けて進めており、有利販売に繋げていきたいと考えている。

また、「ゆみまる」の加工適性を確認するため、県内企業3社にカリカリ梅の加工試験を依頼し、うち2社からは概ね良好な評価で適正な収穫期等が把握できた。

### (5) ウメの成分分析

県内産のウメを分析して「強み」を見出し、効果的な販売戦略や生産向上を図るため、Gアナライズ&PRチーム（群馬県産農畜産物について、おいしさや健康に関わる成分を分析し、その成果を消費者に伝え、消費者の反応を農業生産現場、技術指導に反映させていく取組）でウメの分析を実施した。香り成分や味覚センサー等の分析で得られた結果についてGアナライズ&PRチームにより「ぐんまのうめ」レポートを作成し、分析結果に基づいた白加賀うめのPRを実施した。

#### (6) 流通販売対策び販促活動

県内7産地の作況調査を実施し、計画出荷による有利販売の支援を行った。また、5月下旬に大田市場土間で消費宣伝活動を実施し、ぐんまのうめのPR活動を実施した。

令和6年の群馬県共計生梅の販売実績は、出荷量503t（前年比84%）、出荷額306,429千円（同124%）、単価は609円/kg（同147%）となり、開花期の天候不順等により結実量は少なかったものの、出荷額と単価は近年の最高値となった。Gルート販売については、生育前進の影響で6月中旬以降の第5期は未達割合が増えた。

#### (7) 「ゆみまる」果実の集出荷体制整備

主要品種「白加賀」の受粉樹に向くウメとして平成30年度から産地で栽培が開始されていたところであるが、まとまった結実量が確保できる見込みとなったため、果実の販売も生産者の収益につながるよう、関係機関と連携し、集出荷体制整備やその後の加工流通対策に取り組んだ。

初出荷の本年は1.3tの果実が集まり、その後群馬県特産品であるカリカリ梅に加工され、「ゆみまる」を冠した商品が開発された。なお、初出荷の様子が複数のメディアで取り上げられたことにより、幅広く認知されるきっかけとなった。

#### (8) 新たな担い手確保に向けた取組

新たな担い手確保の取組として、将来の担い手に成り得る人を対象とした「新たなウメ担い手のための栽培技術講習会」を開催した。将来の担い手候補としては、数年後の定年帰農者や他品目生産者を想定し、これまでの生産部会の講習会は平日での開催がほとんどであったため、週休日である土曜日の開催とした。

関係機関からの他方面への周知もあり、受講者数は40名となった。基礎的な内容を広く扱うと共に、栽培技術の核となる整枝せん定について対象者にわかりやすい説明を行い、大変好評を得ることができた。また、西部農業事務所が中心となり榛名地区内での貸し園地希望リストが整備されつつあり、講習会終了後にはナス生産者への園地紹介が行われるなど、新たな担い手への誘導も試みられた。

### 4. 農家等からの評価・コメント（共計生ウメ委員会役員 N氏）

ウメ栽培は、地域の観光資源になっており、収穫には人手もかかるため、雇用も生み出している重要な産業だと思っている。しかし、ウメの価格が低迷し、高齢化もあいまってウメの耕作放棄園が増えた時があり、そのような時に「ウメ産地再生プロジェクト」が始まった。プロジェクトの取組により指導機関より陥没症対策や標高、用途に応じた収穫適期の指導を受け、ウメの品質の向上が図られるとともに「群馬の白加賀」は品質が高いと評価され、ウメの価格は高値で推移している。取引先市場からは産地の維持継続を熱望されており、加工向けを含めて、現在は販売するウメが足りない状況である。

近年の気象災害によって被害を受けることもあるが、農家の生産意欲は高いので、今後もプロジェクトを通して将来を見据えた産地支援をお願いしたい。

## 5. 普及指導員のコメント(西部農業事務所・補佐・三ツ石昌幸)

このプロジェクトは、技術指導や補助事業を担当する地元の農業事務所、研究・開発としての農業技術センター、生産振興・流通対策を行う蚕糸特産課と各機関機関が役割分担し協力して進めており、年を追う毎に実績が上ってきていると感じている。指導機関として、適期収穫による陥没症の発生防止、病虫害防除等による秀品率向上と樹勢維持、受粉樹の導入による結実安定、改植の推進について重点的に指導している。近年は農家の意識改革が進み、ウメの価格が高く維持されており、産地の販売金額の総額も増加している。令和6年度は、「ゆみまる」の集出荷体制や新たな担い手を対象とした栽培講習会の開催等を連携しながら行うことが出来た。今後も関係機関との連携強化を図り、産地が抱える課題解決に向けた活動を行っていききたい。

## 6. 現状・今後の展開等

(1) 生育予測式(硬核開始期、硬核終了期、落果期)を利用したデータを活用するなどして適期収穫による陥没症の発生防止対策を徹底し、品質向上による有利販売に結びつける。

(2) 今後、生産量確保のため、「ゆみまる」等の導入を推進して受粉樹割合を増やすように働きかけ、産地としての生産安定を図るとともに、国の事業を活用し生産性の低い老齢樹の改植を推進する。

(3) 「ゆみまる」が本年初出荷となり、実需者への働きかけを行いながら集出荷体制の整備を行うことができたが、今後は生産者側と実需者の自走による集出荷体制に結び付くよう支援を行っていく。

(4) 新たな担い手確保に向けた栽培講習会に継続して取り組むと共に、優良園地が産地内で残されていくよう、園地継承システムを関係機関と協力しながら整備していききたい。